

## パネルの主旨とまとめ

## 八 巻 和 彦

今回で三回目となる「宗教間対話の思想」と題するパネルであるが、われわれのこれまでの研究の到達点として、人間がもつ精神的機能の一つとしての理性には人類に共通に妥当する普遍性があり、その視点から諸宗教の教義を考察すれば、それらが目指しているものには共通性が多く存在していることが明らかである。ところが他方では、宗教間の（諸宗教の信者間の）争いの源は必ずしも当該宗教の教義の相違対立にあるというのではなくて、むしろ個々の宗教が有する文化（信者が身につけている、儀礼の執行などを典型例とする文化）の間の相違にあるということも明らかになった。逆に表現すれば、文化が類似しているならば、教義的には相違対立しているはずの宗教同士でも、その信者間には必ずしも対立が生じるわけではないということがある。

以上の視点からわれわれの研究課題に解決策を見出すためには、理性と文化の関係についても考察しなければならないことになり、「理性は文化の多様性を超えるか」というサブタイトルを付けた次第である。各発表の具体的内容は前掲の発表要旨を参照していただくことにして、パネルでの議論を踏まえて若干のコメントを記すこととしたい。

一、宗教儀礼を典型例とする文化的な多様性が同一の根源に起因する結果であると説く場合と、逆に一なる根源への崇敬の

形態は多様であつてもよいと説く場合が区別されるべきであるが、それらはいずれも新プラトン主義的な（包含と展開）の理論で理性的に説くことが可能である。

二、他方、文化の多様性は、地球上の自然条件の多様性とそれに主として起因する社会条件の多様性とに由来するものである。その現状は容易に変更されうるものではない。また、当事者にとっては自分の文化こそが正しいものであり、異文化はただ「異文化」であるゆえに誤ったものとみなすという、人間に普遍的に現象する自己中心性による即断と偏見が生じやすい。これが、対立の源となるものである。

三、それゆえに、現実存在する多様性の根底に共通なものがあること（例えば儀礼が自分たちとは異なっているとしても同じ信仰をもっていること）を互いに実感するためには、論理に先立つ相互理解のための具体的な経験が必要である。さもないと、「ラテン人はソフィストのような存在である」と言つてビザンツの学者たちが理性的探求を拒否すると、キドニスが記しているような事態が生じることになる。上記の実感を成立させる最善の方法は、生の基本である寝食を共にする経験であろう。この点では、修道院を基盤として説得活動を行えたアンセルムスは、成功への有力な一因をもっていたと言えるだろう。

四、しかし、見知らぬ者同士が寝食を共にすることは、無前提に可能となることではない。日常的に出会い、かつ共に仕事をすることが、相互の信頼感を醸成することになるだろう。その意味では「異なる者」の、それも交流を自らすすんで望

むことのない者同志の相互の交流とか交易が必要となるだろう。

五、そして、実感された共通性・普遍性を一時的感情にとどめずに確定し固定するためには、理性による論証が必要とされるのである。

本パネルに参加して下さった方々、また、貴重なご意見を出して下さったりパネル終了後もパネリストを囲んで熱心な議論をして下さった方々に改めて御礼申し上げます。

## 瞑想的世界認識と宗教研究

代表者 葛西賢太  
コメンテータ・司会 鶴岡賀雄

## MBSRにおけるスピリチュアリティのあり方

井 上 ウイマラ

Mindfulness based stress reduction program (マインドフルネスに基づいたストレス緩和法)は、Jon Kabat-Zinn によって一九七九年にマサチューセッツ大学医学部に創始され、これまでに約二万人の患者たちが八週間（三十名程度のグループで一回二時間半）のプログラムを終了しその成果を体験している。

当初は治療困難な慢性疼痛から高血圧、心臓疾患、がん、エイズなどの患者がこのプログラムに参加することが多かったが、現在では摂食障害、パニック障害などにも効果があることが検証されている。一九九五年からは Center for Mindfulness in Medicine, Health care and Society (<http://www.unumassmed.edu/content.aspx?id=41252> 2011.8.25) が作られ MBSR の幅広い普及が継続されている。

MBSR が日本でも広く注目を集め始めたのは、うつの再発予防に効果があることが検証されたマインドフルネス認知療法やアクセプタンス&コミットメントセラピーなどの第三世代の認知療法が紹介され始めてからである。